

一八八二年八月五日(土)

カルカッタでイーシユワラ・チャンドラ・ヴィディヤサーガルと

聖ラーマクリシュナの出会い

ヴィディヤサーガルの家

今日は土曜日、スラボン月黒分六日。キリスト暦一八八二年八月五日。時は四時を打ったところ。聖ラーマクリシュナは、カルカッタの大通りを貸馬車に乗ってバドウルバガンに向かつて行かれているところである。お供はバヴァナート、ハズラー、および校長。ヴィディヤサーガルの家にいらっしやるのである。

タクルルの生誕の地は、フーグリー地区にあるカマールブクル村である。この村とヴィディヤサーガルの生誕地であるビールシンハ村とはいたって近い。聖ラーマクリシュナは子供のころからヴィディヤサーガルの慈善行為のことを聞き知っておられた。ドツキネーシヨル南神の神殿にお住まいになっている間も、彼の学識と慈善事業についての話を、年中人づてに聞いておられる。校長がヴィディヤサーガルの経営している学校で教えているということ聞かれて、「わたしをヴィディヤサーガルのところへ連れ

ていつてくれないか？ わたしはとても会いたいのだよ」と言っておられたのである。校長がヴィディヤサーガルにこの話をしたところ、彼はたいそう喜んで、土曜日の午後四時ころ御案内するように、との返事であった。で、いささか質問して言うのに、「どんな様子の、大覚者パラマハンサですか？ 黄衣ゲルテをまとうておられるのですか？」校長は答えた。「いえ、そうではないのです。その方は実に不思議なお方で、赤い縁取りをした衣（女性の衣）をお召しになったり、普通の衣だの、ガウンだのをお召しになっている時もありますし、ピカピカに磨いた靴を履いていらつしやることもあります……。ラースマニ家のカーリー神殿の一部屋にお住まいになっておられます。その部屋に寝台があつて——その上に布団と蚊帳かやがあるのですが、そのベッドでお休みになるのです。見たところ、どこといつて聖者らしい特徴はないのです——ですが、神以外のことは何も知っておられないのです。夜も昼も神様のことだけを想っておられるのです」

馬車は南神トクネンシヨルのカーリー神殿のところから出発した。橋を渡つてシャームバザールを通り、次第にアムハールスト街に近づいた。同乗の信者たちが、もうすぐバドウルバガンですね、と話し合つているとタクールも子供のように楽しそうに雑談をなさつていた。アムハールスト街に入ると突然、タクルの御様子が変わり、神的な緊張感が始まつたようにお見受けした。

馬車はラーム・モーハン・ローイの別邸のそばを通つた。校長はタクルの御気分が変わつたのに気付かず、「あれがラーム・モーハン・ローイの別荘でございます」と何気なく申し上げた。タクールは不機嫌に、「そんなことはどうでもいい」とおっしゃつた。タクールは前三昧状態になられたのである。

ヴィディヤサーガルの家の前で馬車は止まった。家は英国式の二階建てである。敷地の中央に家があり、敷地の四方は塀で囲んである。家の西側に表門と正面玄関がある。玄関は南向きである。西側の塀と二階家の間口は、ところどころ花木が植えてある。西側階下の部屋から、階段で二階に上られるようになっていいる。ヴィディヤサーガルはいつも二階にいる。階段を上すると北に一つ部屋があり、その東に広間<sup>ホール</sup>がある。ホールの南東の部屋がヴィディヤサーガルの寝室である。真南にも部屋が一つある——これらの部屋はそれぞれ、貴重な書物でいっぱいにあふれているのである。壁を背にしたいくつもの書棚には、まことに美しく配列した本がビッシリ詰まっているのだ。広間<sup>ホール</sup>の東隅にテーブルと椅子が置いてある。ヴィディヤサーガルが仕事をするとき、ここに西向きに坐るのである。彼に会見を申し込んでくる人たちも、このテーブルの回りの椅子に腰掛けるのだ。テーブルの上には物を書く道具——紙、ペン、インク壺、吸取紙、たくさんの手紙の束、会計簿、伝票のたぐい、二―四冊のヴィディヤサーガルが読むつもりで置いてある本——等々が見える。その板の間の真南の部屋に小型のベッドが置いてあり——そこで、彼は休息するのである。(訳註——この家は205年時点で当時のまま現存し、ヴィディヤサーガル女子大学の教室として利用されている。希望すればタクトルと会見した部屋も見学可能)

テーブルの上の文鎮<sup>はんちん</sup>の下に積み重ねてあるあの手紙の山——いったい何が書いてあるのだろうか？もしかししたら、こんな境遇の未亡人からのものだろうか。——「私は主人に先立たれ、幼い子供には保護者がなく、世話をしてくれる人もございません。あなた様にみていただくわけにはいかないでしょうか」そのほかに誰かは、「あなた様がカーラマータに行っておられましたので、私ども、月々の

手当を受け取ることができず、大変、難儀をしております」と書いているのかも知れない。又、ある貧しい人はこう書いてよこす。——「あなた様の学校には自由に入学できるようですが、あいにく私には本を買う余裕がありません」ある人は書いてよこす。——「私はどうしても家族を食べさせていけないのです。そこで私に、何か仕事を見つけていただけないでしょうか」また彼の学校の教師の誰かは、こんなことを書いてよこすだろう。——「私の妹は未亡人になり、彼女の全生活は私の肩にかかるようになりました。現在のこの給料ではとてもやっていけません」あるいは誰かは、イギリスからこんな手紙をよこすだろう。——「私はこの地で非常に困窮した状況に陥っております。あなた様は弱き者のよき友であります。願わくは、何ほどかの金子をお送り下さいまして、この切迫した窮状より私をお救い下さいませ」また、どこかの人からはこんな具合に。——「某月某日に、仲裁による調停が裁決されることになりました。貴殿に於いては当日、是非とも御来場あつて、私共の紛争解決にご協力下さるようお願い申し上げます」

タクールは馬車から下りられた。校長が案内して家の中にお連れした。中庭には花の咲いた木が植えてあり、その間を歩きながらタクールは、子供のようにならぬシャツのボタンにさわつて、心配そうに校長におききになるのである——

「上着のボタンが掛けてないけど——このままじゃあ、いけなくないかい？」

お体に裾の長い上衣を着け、上に赤い縁取りをした腰衣カポル（下半身に着ける袴ハカマのような衣）を召して、その端が肩から下がっている。お足にはワニスを塗ってピカピカに光沢つやだしをした靴を履いていらつしゃ

る。校長はわざとさりげない口調で――

「何のお気遣いも要りません。どこにもいけないところなぞ、ごさいませんとも――。ポタンは掛けなくともよろしゅうございます」と子供に教えるように申し上げると、タクールは、さも安心なすつたような表情になられた。

### ヴィデイヤサーガル

階段を上がると、第一の部屋(上がって真北にある部屋)にタクールは信者たちと入られた。ヴィデイヤサーガルは部屋の北隅に南向きになつて坐っていた。前面に磨き上げた長方形のテーブルが置いてある。テーブルの東側には、うしろに寄り掛かりのある長椅子(ベンチ)が一つある。テーブルの南側と西側には椅子がいくつか置いてある。ヴィデイヤサーガルは、二、三人の友達と話をしていた。

タクールが入つていくと、ヴィデイヤサーガルは立ち上がつてお迎えした。タクールはテーブルの東側の長椅子の前に、西向きにお立ちになつておられる。片手をテーブルの上にして――。ヴィデイヤサーガルをずっと以前から知つていたように、じつと見つめて嬉しそうにニコリなされた。

ヴィデイヤサーガルの年令はおそらく六十二、三才で、タクール、聖ラーマクリシユナよりは確か十六、七年上のはずである。一枚の腰衣(カポル)を着て、靴を履き、肌にはフランネルの袖なし上衣をつけている。頭は四角くオリッサ人風に刈り上げている。話をするときにはピカピカ光つてみえる歯ならびが、全部入れ歯なのである。頭は非常に大きい。ひたいが広く、ややずんぐりした体格である。バラモン

階級なので、首に聖糸をかけている。

ヴィディヤサーガルには多くの美点がある。

第一は、学ぶことへの情熱。ある日のこと、校長のいるところでこんなことを言いながら、真底情けなさそうにさめざめと泣いていた。——「私はねえ、勉強したいことが、それはそれは沢山あったんですよ。それなのに、どこで何ができたらう！ まあ、俗世間にすっぱりはまり込んでしまつて、いたいいつになつたら自分のしたいことができるんでしようかねえ」

第二には、すべての生きものに対する慈悲である。ヴィディヤサーガルは慈悲の海である。仔牛たちが母牛の乳を十分に飲めないのではないかと思つて、数年にわたつてミルクを飲まなかつたが、しまいに体が極端に衰弱してしまつたので、やむを得ずミルク絶ちを中止した。また、馬車に乗ろうとしない——馬に苦勞をかけるからである。ある日、一人の市場人夫がコレラの病に取りつかれ道に倒れており、かたわらに大きなカゴが落としてあつた。それを見て、自分でカゴをかつぎ、腕に病人をかかえて家へ連れて行き、手篤く介抱してやつた。

第三には、自由を愛する精神。当局と意見が合わなかつたので、サンスクリット大学の学長という有利な地位を惜しげもなく捨ててしまつた。

第四には、他人に頼つたり、見返りを求めたりしないこと。一人の教員を目にかけていた。彼の娘が結婚するとき、自分でその花嫁衣装を用意して脇に抱えてプレゼントした。

第五には、母親への献身。母親が、「イーシュワラよ、お前が弟の結婚式に来られなかつたら、私

「はほんとうにみじめな気持ちになるよ」と話していたので、カルカッタから歩いて帰った。道すがら、ダモードル河があふれて渡し舟が止まっていたので、向こう岸まで泳いで渡った。そしてそのビシヨ濡れの衣服のまま結婚式の当夜、ピールシンハの母上のもとに到着したのである！　そして言った。「お母さま、来ましたよ！」

〔聖ラーマクリシュナに対するヴィディヤサーガルの敬意、二人の対話〕

タクールは前三昧状態でしばらくそのまま直立されていた。気分を抑制するために(そのまま三昧に入ってしまったように)、時々、「水が飲みたい」とおっしゃる。そうしているうちに、この家の息子たちや親類、友人たちが部屋に入ってきて立っていた。

タクールは前三昧状態のまま長椅子にお坐りになった。十七、八才の青年が一人、その長椅子に腰掛けていた。——ヴィディヤサーガルのところに学資の援助を頼みに来たのである。タクールは前三昧状態で、見神者の透徹した眼力で青年の心の内を皆、知り尽くされたのであるか。少し体を避けるようにして坐られ、次のように言われた。「大実母、この息子は**ずいぶん**この世に執着している——あなたの無明の世界に！　これは無明の息子だ！」

ブラフマンの知識を得るのにあまり関心がなく、ただ経済的に役立つ知識を得ることに汲々としているのはバカげたことだ、ということを取クールはおっしゃったのであるか。

ヴィディヤサーガルは急いで誰かに水を持ってくるよう言いつけ、校長に向かつて、「何か食べ物

を差し上げたら、この方は召し上がるでしょうか？」とたずねた。校長は、「どうぞ、差し上げて下さい」と答えた。するとヴィディヤサーガルはセカセカと自分で奥の方へ行つて、いろんなお菓子を持ってくる、「これはボルドワンから送つてよこしたものです」と説明した。タクルの前においでおすすめし、ハズラー、バヴァナートもお相伴しよばんした。校長へも分けてきた後、ヴィディヤサーガルはこう言った。「あー、あれはうちの者ですから、構わなくていいんですよ」

タクルは、一人の信仰篤い青年のことをヴィディヤサーガルに話しておられる。その青年は今、タクルの正面に坐っているのである。タクルは言われた。「この子はとてもまじめな善い性質だ。本質はバルグ河のように、上側は砂だが、ちよつと掘りさえすれば中に水が流れているのが見えるよ！」

甘いものを召し上がりながら、タクルは笑顔でヴィディヤサーガルと話をしておられる。見る見るうちに部屋は人でいっぱいになり、坐っている者もあれば立つている者もある。

聖ラーマクリシュナ「今日はとうとう海サガルにやってきました。いままでは溝みぞか沼か、せいぜい河ぐらゐにしかお目にかからなかったが、今度こそ海サガルを眺めていますよ」（一同大笑）

ヴィディヤサーガル「ははははは。ではどうぞ、塩水を少しお持ちかえり下さい！ アハハ……」

聖ラーマクリシュナ「とんでもない、塩水だなんて！ あんたは無明アウディヤの大海じゃない、あんたはそれ、智識ウディヤの大海でしょう？」（一同大笑）

コンデンスミルクの海だ！」（一同大笑）

ヴィディヤサーガル「それはまあ、お好きなようにおっしゃっていただきますでしょう」

ヴィディヤサーガルは沈黙して待った。タクルは語られる――



〔ヴィディヤサーガルの純粋な行為、あなたも聖者である〕

聖ラーマクリシュナ「あなたのしていることは、きれいな善い心から出てくる行ないだ。サットヴァ性の作用だよ。サットヴァ性から慈悲は生まれる。慈善の仕事はラジャス性の作用にはちがいないけれど——でもこのラジャスはサットヴァのラジャス性なだから、害にはならない。シユカデーヴァたちは人びとを導くために慈悲の心を残しておかれた——神のことを教えてやるためにね。あなたは皆に学問を与えたり食物を恵んだりしているが、これもいいことだ。無私の気持ちでそういうことをしている、それによって神をつかむことができる。名声のためや、功德を積むためにしている連中は無私の気持ちじゃない。——それに、もう煮え上がっているよ、あなたという人は」

ヴィディヤサーガル「先生、それはどういう意味でありますか？」

聖ラーマクリシュナ「アハハハ……。じゃがいもや人参を煮るとやわらかくなるだろう。そんな具合に、あなたはたいそうやわらかくなっているということさ。とても慈悲深いからね、ハッハッハ」〔訳註——煮るの原語はシッターで、他に成就、熟達、聖者という意味もあり、二つの意味を掛けて使っている〕

ヴィディヤサーガル「はははは。しかし、カライ豆は煮るとますます固くなりますよ！」〔一同笑う〕  
 聖ラーマクリシュナ「あなたは、そうじゃないともさ！ ただの学者連中は半煮えのまま放つてあるようなもの。どうしようもないシロモノさ。禿鷹はずいぶん高く舞い上がるけど、目は墓穴ばかり見ている。ただの学者は、学者という名だけは立派だが、あの連中の女と金に対する執心さといったら——まるで禿鷹そっくり、年中くさった肉を探している。無智無明の世間に執着しきっているんだ

よ。慈悲と、信仰と、離欲と、これが真実の智識が持つ宝だ」

ヴィディヤサーガルは黙って耳を傾けている。一同はこの歡喜に満ちた魂を注視して、この御方の降り注ぐ甘露の法雨を飲み且つ味わっている。

### タクール、聖ラーマクリシュナ——智慧の道とヴェーダーンタの思想

ヴィディヤサーガルは大学者である。サンスクリット大学で学んでいたときは、常に首席であった。試験の度に一番の成績をとり、種々の表彰状やメダル、奨学金スカラシップを受けている。遂にサンスクリット大学の学長にまでなった人物だ。彼はサンスクリットの文法とサンスクリット韻文つづみょうに通曉し、この分野オリエンティの權威である。また忍耐強い努力家なので、独学で英語もマスターした。

宗教の問題に関しては、ヴィディヤサーガルは誰にも自分の意見をのべなかつた。彼は自分で哲学書を読んで研究していた。校長がある日、「あなたはわがインド哲学についてどのようにお考えですか？」と質問すると、次のように答えた。「私はこう感じのですがね——要するに、インドの哲学諸派は、わからせようとしていることが、うまく説明できていないのではないかと」日常生活ではヒンドゥー教徒と同じように一切の祭祀を行い、体に聖糸をつけ、ベンガル語で書かれた手紙の冒頭には必ず、「シユリー、シユリー、ハリ、シヤラナム（神に帰依し奉る）」と書いて神に敬意を表していたものである。

校長はまたある日、彼に向かつて、「あなたは神について、どう思っておられますか？」ときいてみると、彼はこう答えた——「あの御方がどんなものか、わかるワケがありませんよ！ それより今、

我々のしなければならぬことは何か、ということです。私はね——皆が我々のように行動すれば地上がそのまま天国になる、というような生き方をする。これが我々の義務だと考えているのです。どの人も皆努力して、未来の世界がよりよくなるようなことをしなければいけません」

「ヴィディヤー 智識と無智の話をしているうちに、タクルはブラフマン智のことに話を進められた。ヴィディヤサーガルは前述の通りの大学者である。そして六派哲学をよく学んだあげく、神のことはさっぱりわからない、ということがわかった人物である。

「ヴィディヤー 聖ラーマクリシュナ「ブラフマンは、ヴィディヤー 智と無智を超えている。あの御方は造化現象を超えた向こうにある」

「悪の問題——ブラフマンは無性・無相——人々の悲哀はそれぞれの魂にかかわるもの」

「この世界にはヴィディヤー 明智の現象と無智無明の現象の二つがある。智慧と信仰があり、一方には女と金もある。真実もあるし虚偽もある。善もあるし悪もある。だが、ブラフマンはそういうものとは何の関係もないんだ。善悪は個々の魂にかかわる問題だし、真実とかウソとかいうものも、それぞれの魂によって異なるものだ。ブラフマンにとっては、そんなことは何でもないんだ。

ランプの光の下でお経(バーガヴァタ)をよむ人もあるし、にせ金をこしらえる奴もある。ランプには何のかかわりもないことだよ。お天道さまは立派な紳士方の上にも照るし、ナラズ者の上にも照っているだろうか？

じゃあ、この世の不幸や罪やゴタゴタは何と説明するかって？ 答えはこうだ。それは一つひとつの魂についているものだ、とね。ブラフマンには何の関係もないよ。蛇の中には毒を持ったのがいる。ほかのものが咬みつかれたら死んでしまう。けれど、その蛇にとつては何でもない」

「ブラフマンは説明不能、未知のものと不可知のもの」

「ブラフマンはどんなものか、口では言えない。どれも皆、食いちらしの残り滓かすになっている。ヴェーダ、プラーナ、タントラ、六派哲学、みんな残り滓だよ！ 口で読まれたり、口で説明されたりしたから、だから食いカスになってしまったのさ。けれども、たった一つだけ残り滓になっていないものがある。まさにそれがブラフマンなんだ。ブラフマンがどんなものか、今日まで誰も口で言えたものはないんだよ！」

ヴィディヤサーガルは友人たちの方を向いて、

「これは！ これはきつと、最高の言葉だ！ 今日、新しいことを一つ勉強させていただいた。ブラフマンだけが口で汚されていないものなのだ」

聖ラーマクリシュナ「ある父親に息子が二人あった。ブラフマンの智識を学ばせるために、父親は二人を教師のところへ預けた。何年かたって、息子たちは戻ってきて父親にあいさつした。父親は二人がどの程度の智識を得てきたか知りたかと思って、まず兄にきいてみた。

『息子や！ お前は聖典を山ほど勉強してきたらしいが、ブラフマンはどんな様子のものだと思って

いるかね?』——兄はヴェエーダからいろんな文句をひっぱり出してきて、ブラフマンの性質を説明したよ! 父親は黙っていた。今度は弟の方にきいたところ、弟はうつむいて黙っている。何も言おうとしない。それを見て父親は、しんから嬉しそうにして弟に言った。『息子よ! お前、少しはわかったとみえるな。ブラフマンがどんなものか、それは口じゃ説明できないことだ』

人は、それ、をすっかり理解したと思ひ込んでいる。一匹の蟻が砂糖の山に行つて、一粒食べて満腹した。もう一粒口にくわえて巣に戻りながら考えた。『も一度来て、山全体を運んでいこう』低い小さな魂はこんなふうと思うものだよ。ブラフマンが言葉や思想を超えたものだということを知らないんだよ。

どんな大人物だろうと、それ、についてどれほどもわかりやしないんだ。シユカデーヴァたちは大蟻だったことはたしかだがね。それでも砂糖粒を八つか十ほど口に入れただけさ。

〔ブラフマンは実在・智慧・歓喜、ニルヴィカルパ三昧とブラフマン智〕

ヴェエーダやブラーナに書いてあることは——あれはどういうことだかわかるかい? ある人が海を見てきて、誰かに海はどんな様子のものかときかれた。その人は口をアングリあけて——『アー、とにかく物凄いものだったよ! あの波のうねり! あのゴーゴーというどろき!』ブラフマンについての話はおおかた、こんなものさ。

ヴェエーダにあるが、——それ、は歓喜そのものにして、実在・智慧・歓喜なり。シユカデーヴァた

ちはこのブラフマンの大海の岸辺に立つて、眺めたり水にさわってみたりしていた。海には入らなかつたそうだよ。だつて入つたら最後、もどる方法はないもの。

三昧サマデーに入るとブラフマン智が生じる。ブラフマンと対面するんだ。こうなると考えが止まつてしまつて、人はただ黙っている。ブラフマンがどんなものか、人間の口では言えないんだよ。

塩人形が海の深さを測りに行った（一同笑う）。どれだけ深いのか報告するつもりだつた。でも、だめだつたよ。海へ入つたとたんに、たちまち溶けてしまつたから。誰が海の深さを知らせるのかね？」

ある信者「三昧に入つてブラフマン智を得た人は、もう何も話さないでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「ヴィディヤサーガルに向かつて）——シヤンカラアチヤリヤ大師は人びとを教え導くために、智識グヴィディヤの私アミを残しておきなすつた。ブラフマンを覚さとると人は黙つてしまふ。さくらぬ間は何だかだと考える。鍋のパターは水気のあるうちはブツブツいつているが、すっかり水気がなくなるとおとなしくなる。ところが、その中に又、水気のあるルチ（水でこねて伸ばした小麦粉）を入れるとまたジージー言いだす。ルチが焼き上がるとまた静かになる。ちやうどそんな具合に、入三昧の精神ココロは、人びとを教え導くためにそこから下りてきて、また語り出す。

蜜蜂ミツチは、花に止まるまでブンブン唼うなっている。蜜を吸い始めると黙る。蜜を飲んでいい気持ちになると、またグリーン、グリーンと唼り出す。

池に壺を入れて水を満たすとき、ポコポコ音をたてる。いっぱいになると音はやむ（一同笑う）。そして、もう一つの別な壺に水を移さなければならぬときは、またドクドク音をたてる。ハツハツハツハツ

ジユニヤーナ ヴイジュニヤーナ アドヴァイタ ヴイシユタアドヴァイタ ドヴァイタ  
**智慧と大覚、不二一元論・制限二元論・二元論——この三者の調和**

「古代の見神者たちはブラフマン智を獲たのだ。俗っぽい気持ちがほんの僅かでも残っていたら、このブラフマン智は得られないよ。古代の見神者たちはまあ、どんなに苦勞して修行したことか——。朝早く庵から出かけて行つて、森や山の中でたった一人で、一日中瞑想工夫していた。夜になると庵に戻つて、ほんの少し木の実や果実を食べるだけ！ 見る、聞く、さわる、といった世間のあらゆる対象から心を遠ざけて、そうして自己の内にブラフマンを覺つたんだよ。

現代(カリユガ)は、いろんな食物をとらなくては体を養つていけない時代だから、この肉体が自分だという意識がどうしてもなくなならない。こういう有り様でヴェーターンタ式に、『我は、それなり(ソーハム)』と言っちゃいけない。世間並みのことをあれもこれもやりながら、『私こそがブラフマンである』なんて言つては、正しくないんだよ。世間のことが捨てきれない人たちや、このワタシが……』という気持ちからどうしても脱けられない人たちは、こうしたらいい。つまり、私は神の召使い、私は神の信者だと誇らしく思っているのがいい。信仰の道をすすんでも、ちゃんと神をさつることができるんだから。

智慧の道を修行する人は、これではない(ネーテイ)、これでもない(ネーテイ)、と感覚を通してわかる智識を次から次へと捨てていつて、そうして最後にブラフマンを知ることができる。ちょうど、階段を一段一段上がつて屋根にのぼるようなものだ。ところが、もう真理を体得んだ人は、つまり屋

根の上にあがってしまった人は、さらにあの御方に近づいて、それ以上のものを見ているんだ。その人はね、屋根と同じ材料の煉瓦やセメントで、一つひとつの階段もつくってあるのだということになるんだ。ネーティ、ネーティと打ち消しつくして、最後にブラフマンとして感じとったもの、それ自身が一つひとつの生物と世界に成っているんだよ。真理をつかんだ人というのは、無性無相のそれが、ありとあらゆる性質と色相なんだということがわかつている。

屋根のてつぺんに人は長いこと居るわけにはいかないから、また下りてくる。三昧に入ってブラフマン智を得た人びともまた下りてきては、生物や世界に成っているのは、それが、ブラフマンそのものだとということに納得するわけだ。ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、の音階のシだけをいつまでも発音してはいられないからね。私がすっかりなくなるわけにはいかない。私がとりもなおさず、それで、それが、生物、世界、ありとあらゆるものだとわかる。これを大覚というんだよ。

智慧の道も、道だ。智慧と信仰の道も、道だ。それに信仰だけの道も、道なんだよ。智慧のヨーガも正しいし、信仰のヨーガも正しい。どんな道を通ってもあの御方のもとに行けるよ。けれど、私が残っている間は、信仰の道が一番楽だ。

覚者はブラフマンを金剛不壊、不動のスメール山のようにと見ている。この世界の出来事は、それがのサットヴァ、ラジャス、タマスの三性で起こっているのだ。それが、自体は無関係だ。

覚者は、ブラフマンが即ちバガヴァン（至聖至高の人格神）だ、ということを知っている。三性を超越したものが、即ち六つの力（富、力、名声、美、知識、捨離）を持つバガヴァンなのだ。この



生物世界、心や知性、信仰や離欲、それに智識も、みんなあの御方の豊かな財産だ。ちから

ウフフ(笑いながら)、旦那様に門のついた家屋敷がなかったら——あつても売りに出されたりしていたら——その旦那はもう、旦那じゃないだろう(一同笑う)。神様には六つの力があるんだ。そうでなかったら、いったい誰が信じるものか(一同大笑)」

〔遍在者は一、顕現は多様〕

「まあ、ごらんよ、この世界のすばらしいこと！ いろんな種類のものがあつて——お月さま、お日さま、夜空をかざる沢山の星座。さまざまな生きもの——大きい、小さい、善い、悪いの、力の強い、力の弱い……」

ヴィディヤサーガル「神は、ある者には多くの力を与え、ある者には少ししか力を与えないのですか？」  
聖ラーマクリシュナ「あの御方は一切所に遍在して、すべてのものの中にいらっしゃる。蟻ンコの中にだつて——。けれども力の顕現あらわれは、ものによつてちがうよ。そうでなかったら、一人の人間が十人を相手にまわして打ち負かしたり、誰かがある人の所から逃げ出してきたりするわけがないし、それに——じゃあ、あなたのことをどうして皆がこんなに尊敬するんだい？ 角つのでも生えているのかい？ アハハ……。あなたには慈悲心があり、学識がある——だから皆がこうして、わたしだつてこうしてわざわざ会いに来る。そうでしょう？」

ヴィディヤサーガルはおだやかに笑っていた。

〔単なる学問、本を読んだだけの知識は値打ちがない。信仰こそ尊い〕

聖ラーマクリシュナ「ただの学識だけなら何の値打ちもない。神をつかむ方法を探したり、神を知るためにこそ書物は読むものだよ。ある聖者の持つている本に、何が書いてあるのか？と一人の人が聞くと、聖者は開いてみせた。ページごとに、オーム、ラーマと書いてあっただけ。——ほかのことは、何一つ書いてなかったそうだよ！

ギター師の教えは、結局、何だと思う？ 十回くりかえしてみるとわかる。ギターギターギター……。しまいにターギターギターになる。つまり、ギター師はこう教えているわけだ。ターギター（捨離）の意——さあ、生きとし生けるものよ、すべてを捨てて神をつかむために努力せよ、とね。

坊さんだろが在家だろうが、自分の心からいんな執着を捨てなけりゃいけない。

チャイタニヤ（ディグ）様が南インドを巡礼したとき、一人の男がギター（ディグ）を読んでいるのに出会った。別の男がちよっと離れたところに坐って聞いて泣いている。——涙をこぼして泣いている。チャイタニヤ（ディグ）様は聞いてみた。『お前、これが皆、理解できるのか？』

かの男は答えた。『タクル！ 私には全然ナニもわからないのです』

『じゃあどうして、そんなに感激して泣いているのかね？』

男はこう答えた。『私にはアルジュナの戦車と、その前に師のクリシュナが坐って語り合っているのが目に見えるようで、それで私は泣いているのです』

## バクティ・ヨーガ(信愛の道)の秘密

「真理を体得した人、つまり覚者はどういふわけで信仰を持ち続けているのか、わかるかい？ それ  
は、私の念おもが無くならないからだ。三昧のときには私は無くなるのだが、三昧から下りるとま  
たもどつてくる。まして、普通の人間の我執がなんか、どうしたつて無くならない。アスワッタ(イ  
ンド菩提樹)の樹を切つても、次の日には新芽が吹かいてくる(一同大笑)。

正しい智慧を獲た後でも、まだ私はどこからともなくやつて来る！ 夢で虎に追つかけられ  
て、目が覚めたのにまだ胸がドキドキしている。生きものは、この私があるためにどんなに苦  
しいことか。牛はハムバー(ヒンディー語の私)、ハムバーと啼なくから、どんなに酷い目にあうことか。  
スキに繋つながれて、降つても照つても働かなけりやならん。それから肉屋に切られて、皮で靴を作つて  
履はかれ、太鼓になつて叩かれる。ハハハハ……。

それでもまだ楽にならない。最後に腸からヒモができる。このヒモで木綿ざらしの道具をつくるん  
だ。そうなるとやつと、私ハムバー、私ハムバーと言わなくなつて、トゥフ(あなた)、トゥフ(あなた)と言う。トゥフ、  
トゥフと言うようになれば、救われて楽になるんだよ。おお、神さま！ 私はあなたトッフの召使い、あな  
たが御主人。私は子供、あなたがお母さん。

ラーマがハヌマーンにきいた。「ハヌマーンよ、お前はわたしをどんなふうに見ているのだ？」と。  
ハヌマーンは答えた。「ラーマ様！ 私がという念おもが私の中にあるときには、あなたが全体で私はそ

の一部分。あなたが御主人で私が召使い。こう見ております。しかし、ラーマ様！ 真理の智慧が生じたときは、あなたはわたし、わたしはあなたです」と。

主人と召使いの気持ちでいるのは、いいことだよ。私は何としても無くならない。どうしても追いつけない。じゃあ、居させてやって、この仕様のない奴を神さまの召使いにしてしまえ」

〔ヴィディヤサーガルへの教訓、私と私のもの、これが無智<sup>アジュニヤナ</sup>〕

「私と私のもの、この二つが無智だ。私の家、私の財産、私の学識、これらすべて私のもの——こういう思いは無智から出てくる。おお、神よ、あらゆることはあなたがなさり、あらゆるものは全てあなたのものです。家も、家族も、息子も、娘も、使用人も、友人、知人、みんなあなたのものです。——こういう気持ちは真理の智慧から来る。

死ぬってことをいつも心にとめておきなさいよ。死んだら何一つ、一緒に持っていけないものなんかないんだから——。この世には何がしかの仕事をするためにやって来たんだからね。ちようど、郷里<sup>ク</sup>の家からカルカッタに用足しに出てくるようにね。大金持ちの大庭園で、管理人が見物客に向かつて、『これが手前どもの庭園でございます。この池も手前どもで造りましたので……』などと言って案内する。けれども彼が何か失敗してクビになるときは、マンゴー材の腰掛け一つ持ち出すことはできない。まあ、門番にたのんでコッソリ運ぶくらいのもので、ハッハッハ。

<sup>バガヴァン</sup>神様は二つのことにお笑いなさる。

医者が病人の母親に向かつて、「お母さん、何でそんなに心配しているのですか？ 私が子供さんの病気をよくしてあげますよ」と言う。——このとき一度お笑いなさる。こう言ってお笑いになるんだ。わたしがこの子を死なせようとしているのに、こいつは自分が助けてやる、なんて言っている！ 医者は自分が行動者だカルターと勘違いして、神様だけが行動者だということを忘れていたのだ。

それから、二人の兄弟が土地にひもを張って、こちら側が私のもので、あちら側がお前のものと言っているとき、神様は一度お笑いになる。こう思ってお笑いになるんだ。この世界どころか、全宇宙はわたしのものなのに、あいつらはこの土地は自分のものだと言っている」

〔方法——信念と信仰〕

「頭で考えて、あの御方がわかると思いませんか？ あの御方の召使いになって、すべて明け渡してあの御方を呼ぶんだよ」

聖ラーマクリシユナは、おもむろにヴィディヤサーガルの方を向いて、笑いながらお問いになる——聖ラーマクリシユナ「さて、あなた様の信仰は、どんな態度を取りなさるのかな？」

ヴィディヤサーガルは静かに微笑んでいたが、やがて口を開いた。

ヴィディヤサーガル「そうですね……。そのことにつきましてはいつか、あなた様にだけ独りでコツソリ打ちあけましょう」

部屋は笑いの渦にまきこまれた。

聖ラーマクリシュナ「あつはつは、あの御方はね、学問でわからうたつて、わかりゃしないよ」  
こう言われてタクールは、神の愛に酔われたように、歌をうたい出された。

〔神は無限——頭ではわからない〕

カーリーの、性と相を知るは誰ぞ——

六派の哲学 はるかに及ばず……

ムーラダーラにサハスラーラに絶ゆることなく

好ましき心像を想い描きて

カーリーは蓮の花むらに

配偶と睦み合う白鳥のごとし

絶対の歓喜にみちあふれし真我

カーリーは至聖の音オームの如し

十重二十重の栄光に光りかがやき

その意志は大宇宙の法則なり

その子宮に全宇宙をはらみ

その意志が宇宙の法則となる

大いなるものの性と相を

知り得るは唯ひとり 大時<sup>マハーカール</sup>のみ……

マハーカール——絶対者ンヴァ

大海を泳ぎ渡らんとして力つき

ただよえる人を見てプラサードは笑う

魂は知るとも 心ではわからず

月を捕えんとして手をのばす

小児の愚を くりかえすなかれ、と——

聖ラーマクリシュナ「わかったかい、その子宮に全宇宙をはらんでいるのさ。大いなるものの性と相が、人間の頭でどうしてわかるものか！ それからそれ、言っているだろう、六派の哲学もはるかに及ばず——学問ではあの御方にふれることもできないよ」

〔信念の偉大な力——神を信じることと大罪〕

聖ラーマクリシュナ「信念と信仰とが、どうしても要る。——信じる——ということの力がどんなに

大きいか知っているね。ある人がセイロン島(現スリランカ)から海を渡って来るときに、ヴィビィシヤナ(訳註)はこう言った。『この袋を服にしつかり結びつけておけ、そして安心して進め。水の上をちゃんと歩いていけるぞ。だが開いてみてはいかん。開いてみたら最後、沈んでしまうぞ』その人はいとも楽に海の上を歩いていった。信じることの威力はこんなものだ。しばらく進んでからこの人は思った。水の上を歩けるとは、ヴィビィシヤナ様はいったいどんなお守りを下すつたのだろう、と。それでとうとう開けてみたら、ただ、ラーマ〴の名を書いた木の葉が一枚入っただけ。ナーンだ、こんなものか！』と思つたとたん、沈んでしまった。

話にあるだろう、ハヌマーンはラーマの名を信じきって、その信念の力で海を飛び越えてしまった！ それなのに、ラーマ自身は土手を築いてやつと渡つた！

もし、あの御方を信じきっていたら、そうすりゃ、たとえ罪を犯していても、それどころか大罪(牛、バラモン、女を殺すこと)を犯していたって何も恐れることはない。

こう話されて、聖ラーマクリシュナは信仰のあり方を指示なさるようにつつとりとした様子で、信念強き偉大な魂〴を歌われた。

(訳註) ラークシャサ(悪鬼)であったヴィビィシヤナはきびしい苦行を行った結果、ブラフマー神より価値のない行為はせず、常に正しく生きる〴という恩恵を与えられた。その結果、兄ラーヴァナがラーマの妻シーターをランカーに連れ去った時、シーター奪還の為、ラーマの軍について戦った。(『ラーマヤナ』より)



ドウルガー、ドウルガーと御名よびて

われもしこの世を去るならば

いとあさましき身なれども

ついに神をば知るならん

牝牛めうしや僧を 手にかけて

胎児はらこを殺し 酒によい

かよわき女を 傷つけて……

重ねし罪も わがこころ

つかの間さえも気にならず

大実母ママの御足にただすがるなり

### 神を愛することが人生の最終目的である

聖ラーマクリシュナ「信念と信仰。信仰によってあの御方に簡単に触れることができる。あの御方が恋しくて恋しくてたまらなくなれば、あの御方に触れることができる」

この言葉を話されながら、タクル、聖ラーマクリシュナは再び歌われた。

わがこころは君を求めて

暗黒の部屋を手探りて狂いあがく

すべてを忘れる愛がなくては

どうして君をつかまえられよう

月が素直に日にしたが

大きな部屋の中のあの小さな秘密の部屋に

暁<sup>あ</sup>け方となれば、入れてもらえるように

力も誇りもすべて、すべて君にゆだねよう

六派の哲学もはるかに及ばぬ

ヴェーダ、タントラ、シャーストラの経典も説き明かせぬ

信仰と聖愛<sup>あ</sup>の香ぐわしく甘い

水だけを飲んで喜ぶ永遠の君よ

君を求めてすぐれた尊いヨーギーたちは

今も昔もヨーガの修行にはげむ

そのところが目覚めたならば

神は磁石のように 鉄のわたしをつかまえる

ブラサードは言う

私は あの御方を 母と思い

おさな子のように 慕いもとめる

庭で鍋をこわそうか、いやこわしはしない

心よわかってくれよ

庭で鍋をこわす——あれやこれやとひねく  
りまわして、肝心なものを台なしにしてし  
まう意

〔サマーデイ  
三昧に入られたタクール〕

歌をおうたいになりながら、タクールは三昧に入られた！ 掌を合わせて！ お体はまっすぐに、身動きもなさらない！ 両の目は、まばたきもなさらない！ あの長椅子の上に西を向かって足をぶら下げて坐っておられる。部屋の中の人は皆、緊張してこの驚くべき神秘なお姿に見入っていた。学者ヴィディヤサーガルも黙然として注視していた。

やがて、タクールは普通の状態に戻られた。深く息を吸い込んで、またニコニコ笑いながらお話しを

なさる——「心から慕って信仰することが一番正道——あの御方を大好きになることさ。ブラフマンであるところの、それが、大実母とよばれているのだ。

ブラサードは言う

私は あの御方を 母と思ひ

おさな子のように 慕いもとめる

庭で鍋をこわそうか、いやこわしはしない

心よわかってくれよ

ラームブラサードは自分の心に向かって、『心よわかってくれよ』と言っている。ヴェーダのなかでブラフマンという名の、それを、自分は大実母と呼んでいるのだ、ということをつかからせようとしているんだ。無性のものが、そのまま一切性。ブラフマンが、すなわち造化力。動かないものとして感じられるとき、ブラフマンと言う。創造し、維持し、破壊していると見るとき、それを根元造化力と言ひ、大実母カーリーと言う。

ブラフマンとシャクティは同じもの。火と燃える力のようなもので、火といえは燃える力がわかり、燃える力といえは火がわかる。一方を思えばもう一方を思わないわけにはいかない。

あの御方のことを、母さんと呼ぶのだ。母さんというものは、恋しい恋しいものだよね。神様が

恋しくてたまらなくなれば、神にふれることができる。慕って、信じて、恋しがって、それから固い信念。も一つ歌をおきき——

〔方法——まず信じることに、そのあと信仰〕

深く想えば 愛は生まれ

愛ふかきほど源みなもとふかく

つかみて 信は ゆるぎなし

大実母おんははの御足もと 甘露の海に

わが心 つねに浸かりてあれば

礼拝、護摩、供物、すべて用なし

心が浸かるとは、こころがびったりとくつつくほどに、あの御方が好きで恋しくてたまらなくなるということだ。甘露の海とは不死の海だ。そこに浸かれば人間はもう死なないのだ——不死になるんだ。あんまり神さま神さまと夢中になっていたら、いまに頭がおかしくなるんじゃないかと想っている人もあるが、そうじゃない。神は甘露の海なんだよ！ 不死の大海なんだ。ヴェーダでは、あの御方を「不死」と言っている。そこに浸かれば、もう死なないのだ——不死になるんだ」

〔奉仕の道と無私の行為——世をたすけること〕

「礼拝、護摩、供物、すべて用なし。もし、あの御方が好きでたまらなくなったら、もうこういう決まりきったことは、おおよそ必要がなくなる。風が吹かない間はウチワを使う必要もある。南風が自然に吹いてくれればウチワは放っておかれる。もうウチワの必要はないだろう?」

あんたのやっていることは善い仕事だよ。もし、オレがしてやっているんだ、というウヌボレを捨てて無私の心であれば、そうすりやすごく善いことだ。無私の行いを続けていると神様に対する信仰と愛が増してくる。無私の行いを続けているうちに神をつかむことができるよ。

だがね、あの御方への信仰と愛が増えてくるにつれて、仕事は減ってくるものだ。家の嫁さんが子を孕めば、姑さまは家事の仕事を減らしてくれる。月がすすむにつれて姑さまはもつと仕事を減らしてくれる。十ヶ月目になればぜんぜん仕事をさせない。胎の子に障ったり、お産のとき面倒なことになったりしないようにね、ハッハッハ。

あんたが慈善の仕事をするのは、本当はあんた自身のためになるんだよ。オレがしてやっているんだ、というウヌボレを捨てて無私の心でそうしたことが出来るようになると、心が清まってきて神への愛がだんだん深まってくる。そして、あの御方をつかまえることができる。世の中を助けることなど、人間には出来っこないんだ。それはあの御方のなさることだ。月や太陽をお創りになって、母親や父親に子供への愛を下さって、高貴な魂に慈悲心を下さって、修行者や信者に信仰を与えて下さったその御方が、なさることなのだ。利己的な動機なしに他人のためになる仕事をする人はね、実は自

分自身が祝福されて幸福になるんだよ。

〔無私ニシユカマ・カルマの行為の目的——神を見ること〕

あんたの心には黄金があるんだが、まだ自分では気がついていないようだね。うつすら土がかぶさっているからね。いったんそれを見つけたら、他のいろんな仕事は減ってくるよ。家庭でも嫁に子が生まれたら、嫁は子にかかりつきりになる。いつも抱いたりしよったりしてあやしている。そうになると、姑しゅうとめさまは普通の仕事をさせるわけにはいかない（一同笑う）。

もつと前に進みなさいよ。木こりが木を切りに行つた。——そこで会つた坊さんに、もつと先へ行け、と言われた。先へ歩いて行つたら白檀の木をみつけた。何日か経つて考えた。そうだ、あの坊さんは先へ行けと言いなすつた。白檀の木のところまで行けとは言わなかつたつけ。それでまた先に行つたら、銀鉱を見つけた。また何日か経つて先へ行つたら、金鉱をみつけた。またその先でダイヤとかの色々な宝石の山をみつけた。そつくり持ちかえつて、いっぺんに大金持ちになつたそうだよ。

無私ニシユカマ・カルマの仕事ができるようになると、神さまが大好きになつてくる。だんだんあのお恵みがいただけで、あの御方に触れられるようになる。神様に対面して、いっしょに話ができるようになるよ。ちようどわたしがあんたと話をしているようにね!」

一同、水を打つたように静まりかえっている。

## タクールは無私の慈悲の大海

感動のあまり言葉もなく、部屋のなかの大ぜいの人たちはこの話に聞き入っていた。学問の女神サラスワティーが聖ラーマクリシュナの舌にのりうつり、大学者ヴィディヤサーガルに教訓を与える形をとって、生きとし生けるものの真の幸福のために話をしておられるかのようである。夜になった。時間は九時に近い。タクールはいとまを告げようとなさった。ヴィディヤサーガルに向かって笑いながらおっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「いままでしゃべったのは余分なことだよ。あなた様はみんな御存知のこと。——だが、気にかけていないだけ（一同笑う）。海神ヴァルナの箱には数えきれない宝玉が入っているのに、ヴァルナ大王はいつこうに関心がない！」

ヴィディヤサーガル「はははは、よろしいようにおっしゃって下さい」

聖ラーマクリシュナ「アハハ……、そうだろう。使用人の名前を知らない旦那方も大ぜいいるよ（一同笑う）。それに、邸の中のどこにどんな貴重品がおいてあるかさえ知らない旦那もいるし……」  
対話をきいて誰もが心から喜んでいて。皆のざわめきが、ふと静かになった。タクールが再びヴィディヤサーガルに笑顔で話かけておられるのだった——。

聖ラーマクリシュナ「いちど、カーリー寺の庭園にわを見においで下さい。ラースマニ家の庭園にわです。そりゃ素敵すてきなところですよ」



「ヴィディヤサーガル」参上いたしますとも。あなた様がこちらへお越し下さったのですから、当然私も伺わなくては！」

聖ラーマクリシュナ「わたしの所へだつて？ チェッ！ チェッ！」

ヴィディヤサーガル「え？ どうしてそんなふうにおっしゃるのですか？ 教えて下さいませ」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ。わたしは小さい釣り舟（一同笑う）。小川でも沼でも大きな河でも自由自在に行ける。だが、あなた様はでっかい汽船でいらっしゃる。途中で浅瀬に乗り上げてしまうかも知れないからね」（一同大笑）

ヴィディヤサーガルは笑ったまま黙っている。タクールも面白そうに笑っておられる。

聖ラーマクリシュナ「ハハハ……、今時は汽船でも通れるさ」

ヴィディヤサーガル「そうですか……。あ、今は雨期モンスーンですからね、なるほど！」（一同大笑）

校長は独り言——新しい情熱モンスーンの雨期、新しい情熱モンスーンの時には、名誉も不名誉もかなくなりすてるのだ、なるほど！

タクールは立ち上がられた。お供の信者たちもいっしょである。ヴィディヤサーガルは親戚や友人たちと共に立っている。タクールを馬車のところまでお連れするつもりだろう。

聖ラーマクリシュナは立ち上がったままでおられるのは、どうしたわけだろうか？ 根本ムートラマントラ

（大実母ダイモトの色を唱えていらっしゃるのだ。唱えながら前三昧状態になられた。この無条件、無私の慈悲の大海！ 偉人ヴィディヤサーガルの霊的祝福を大実母のもとにお願いしておられるのであ

る。

やがてタクールは信者たちと共に階段を下りられる。一人の信者がお手をとっている。ヴィディヤサーガルは友人たちと手に手にローソクを持って、行く手を照らしながら御案内して行つた。スラボンの月の黒分六日目なので月はまだ昇っていない。薄暗がりの中庭を通つて、一同はローソクのやわらかい明かりに頼りながら門のところまで歩いて来た。

聖ラーマクリシュナが門のところにお着きになったとき、一同は美しい光景を見て立ち止まってしまった。前方にベンガル風の服装をした威風堂々たる髭をたくわえた紳士がいる。年のころ三十六、七歳で頭にシーク教徒のような白いターバンを巻き、身に着けているものは下衣カボル、くつ下モジャ、上衣ジャマ——肩衣チャドルは着けていない。皆が見ていると、この紳士は聖ラーマクリシュナのお姿を見かけるや否や、地べたにターバンを巻いた頭をこすりつけて平伏する。彼が立ち上がると、タクールはおつしやつた。「バララーム、お前かい？　こんなに夜おそくどうした？」（訳註——バララーム・ボースは富裕な地主で、極めて熱心な信者であり、後年、彼の寄付はミッシヨンの創立に大いに役立った）

バララームはにっこり笑つて——「私ほだいぶ前に来て、ここに立つておりました」  
聖ラーマクリシュナ「どうして、中に入らなかつたの？」

バララーム「はい——。皆さんがあなた様のお話をきいておられたので、途中で入つてお邪魔しなかつたのでございます」

こう言つてバララームはまた笑つた。

タクシーはお供の信者と共に馬車に乗られた。

ヴィディヤサーガルは校長に向かつてそっと、「馬車の料金をお払いしましょうか？」

校長「ありがとうございます。用意してありますから御心配なく」

ヴィディヤサーガルとは皆、タクシーに御辞儀をした。

馬車は北に向かつて出発した。<sup>トフキネーシヨル</sup>南神のカーリー神殿へ戻るのである。皆はまだ、馬車の行く手を見つめて立っている。胸の中でこう思いながら——この偉大な聖者はいったいどういう御方なのか。こんなにも神を愛し、そして人びとの家をまわっては神を愛することこそ人生の目的であると語りあ  
るく、この御方は……。